

★米国による新しい小型核弾頭の実戦配備を非難する＝田中 靖宏

米海軍はこの程、潜水艦発射の弾道ミサイル (SLBM) に爆発力の小さな新しい小型核弾頭を装備して実践配備した。配備された核兵器は、爆発力がヒロシマ型原爆の3分の1 (5～6キロトン) とされる小型核弾頭 W76-2で、生産を終えた第一号がトライデント型原潜USSテネシー搭載の弾道ミサイルに装備され、同原潜は昨年末にジョージア州のキングスベイ基地を出航し、実戦のパトロール任務についた。

米国による小型核の潜水艦発射ミサイルへの実戦配備は初めてだ。米国防総省は「抑止力を強化するもの」と正当化しているが、核兵器廃絶に向けた世界の動きに逆行するだけでなく、核軍拡と核戦争の危険をこれまでになく高めるものと国際的な批判が高まっている。日本 AALA は強く非難するとともに、安倍政権にたいし唯一の被爆国の政府として、米国に配備の中止を求めるよう要求する。

小型核の原潜配備は、米科学者連盟 (FAS) のハンス・クリステンセン、ウィリアム・アーキン両氏が1月末に暴露し、その内容を米国防総省が2月4日の声明で認めた。

米科学者連盟の2人の専門家は FAS のホームページに掲載した報告のなかで、今回の動きを「低出力」と「迅速」という2つの言葉で特徴付けている。「低出力」は爆発力が比較的小さく「使い易い」という意味で、米軍部は「通常兵器と核兵器の間の隙間を埋めて」対応の柔軟性と抑止力を高めると説明している。クリステンセン氏は、軍部が小型核の配備で「選択肢が広がった」と強調していることを紹介し、非核保有国にたいする先制核攻撃の可能性を排除していないと危険性を指摘している。

「迅速」は、原潜で海中を標的近くまで接近して攻撃するため、目標への到達時間が短く (15分程度)、敵のミサイル迎撃システムを容易に突破できるという意味だ。これまで空軍が小型核を実戦配備していたが、飛行時間が長いうえに敵の防空システム突破がむづかしいことが課題になっていたという。

米軍部は潜水艦ミサイルへの小型核の配備を、ロシアによる小型核の使用戦略に対抗して抑止力を高めるものと説明しているが、両氏はイランや北朝鮮にたいする核脅迫の意味合いを指摘している。アーキン氏によればオバマ政権末期

の2016年「グローバル・サンダー（地球規模の雷鳴）17」と名つけた軍事演習が行われ、そこではイランが米空母を撃沈し、あるいは米軍に化学生物兵器を使った場合の核攻撃を想定したという。

ロシアのリュブコフ外務次官は「米国が核の敷居を実際に下げ、限定核戦争を行って勝利する可能性を考えている証拠だ」と反論。米科学者連盟は、世界的な核軍拡競争に拍車をかけ、偶発的な核戦争の危険を高めると警告している。また核廃絶国際キャンペーン（ICAN）は声明で「小型で低出力のため担当者は使用をためらわない危険がある」「実際に使われれば数十万人の犠牲者と環境破壊を呼び起こす」と非難している。

（以上）